◤追 悼 文◢

須田一幸先生の３つの思い出
― 誠実で穏やかな泰斗 ―

黒　川　行　治（慶應義塾大学　教授）
Yukiharu Kurokawa, Keio University

あまりにも早いご逝去であった。実証研究におけるフロント・ランナーとして20年間獅子奮迅の活躍を続けられ、金融市場と財務情報の相互浸透の実態を企業行動の観点から明らかにする最先端の研究成果を競っている最中であった。須田一幸先生の存在によってわが国会計学の実証研究の水準が国際的レベルに引き上げられたのである。しかもこの間、自己の研究に没頭されるだけではなく、後進の研究者を育て、学会の所用もこなされ、公共社会のためにも尽くしてこられた。須田先生とは20年余にわたるお付き合いであり多くの記憶があるが、その中から３つを選び記述することで、須田先生のこの世での存在の有り様を後世にお伝えしたい。

第１に、須田先生が米国留学からご帰国されてすぐ、ワッツ＝ジンマーマンの翻訳書『実証理論としての会計学』を刊行する前に、神戸で学会に出席する道すがらお会いしたときの印象である。約20年前は、学会に出席する場合にはスーツにネクタイが慣行であった。そこに、ジャケットにジーンズ風のパンツ、明るいブラウンの鞄と靴の出で立ちで登場され、まだ少壮の学者の風も残していたので、とても似合って様になっていた。さらに、学会の報告会場では、そのオシャレな学者の報告者への質問が、最先端の実証研究を習得されてのことであり、新鮮かつ的を射ていてともかくも恰好良かった。私も1986－88年まで米国に留学しワッツ＝ジンマーマンの原書を読み、帰国後実証研究をしていた頃で、「効率的市場仮説の成立に関する一連の実証研究と市場を誤導させるかのような企業の決算行動を明らかにする研究との両立の意義」を学会の休憩時間に須田先生と語ったことを覚えている。わが国で実証研究が本格化する草創期の話である。

第２に、約10年前に公認会計士第２次試験委員（財務諸表論）でご一緒する機会があった。当時の試験制度は、１科目あたり５人の委員で短答試験と論述試験の問題を作成し、採点することになっていた。３年任期で各委員は任期をずらして任命されており、一部ずつ委員は交代していく。私の方が年上で先に試験委員になっていたので、経験者の立場だった。試験問題作成過程では試験委員間でよく議論をする。とくに財務諸表論が担当なので、会計理論に属する議論であり、正解がかならずしも一つしか存在するとは限らないこともある。須田先生はご自身が師匠と考える中村忠先生の理論を重視されていた印象が大きい。「師匠を大切に思っているのだな」と心が温まるのを覚えた。須田先生のお人柄を一言でいえば誠実で責任感があり、真っ直ぐな思考をされる方である。責任感は時として自己の心身を痛める。当時の公認会計士試験委員のタスクは過酷としか言いようがないものであった。１万数千人の短答試験受験者を足切りで３千数百人に絞った後の論述試験受験者３千数百人の答案は、白紙など有るはずもなく、同程度のレベルにある受験者が精一杯書いた

答案になっている。その答案に差をつけて採点しなければならない。私の経験では、１行ずつ読んで細かく加点するので、１枚あたり５分必要であった。１時間に12人分しか採点できない。正味10時間採点に没頭しても１日に採点できるのはせいぜい120 人分である。３千数百人分の答案を採点するのに何日必要であろうか。しかも、500枚程度終わったころに漸く採点基準が安定するので見直しを数百枚することになる。試験委員に任命される年頃というのは50歳前後で、研究と大学等の所用に追いかけられている頃でもある。試験委員中の須田先生の学会での大活躍の様子を見ていて、その強靱な心身にびっくりしていたが、今から思うと、当時の公認会計士試験委員の過酷な仕事がご病気の遠因の一つになったのではないかと思えてならない。誠実で責任感の強い人は、時として自分の寿命を短くするのである。

第３に、２年半前に２つの学会が統合して設立した当学会すなわち、日本ディスクロージャー研究学会の統合準備での思い出話しを記述したい。当学会は、実証研究を主たる研究領域とし大学における研究者が主たる構成員であった「ディスクロージャー研究学会」と、経営・会計実務の事例研究、公会計や非営利組織の会計などの比較的幅広いテーマを対象に、会員として実務家も多く参加されていた「日本経営ディスクロージャー研究学会」が統合した。両学会それぞれの設立の経緯や紛らわしい名称等も踏まえ、前者の柴会長、須田事務局長、後者の黒川会長（私）、亀川理事長が知己であることから、この時期を逃せば統合は不可能との結論に達し、準備委員会を作り２年余をかけて統合にこぎ着けた。須田先生は研究活動で超多忙にもかかわらず事務局長として学会運営の諸事に当たっておられ、さらに統合のための準備に尽力された。発病される数カ月前にも、準備委員会の会合の後、一緒に飲んでいた。須田先生のお酒はさわやかである。人の悪口をまずはおっしゃらない。穏やかで聞き上手である。柴教授は須田先生と気が合ったに違いない。歳を重ねる程、同じ体験をしてきた同年代の知己と飲む酒席がこの上ない楽しみの一つとなる。私的にも須田先生のご他界はあまりに大きな損失としか言いようがない。

須田先生のように、わが国において実証会計研究を牽引する立場に居ながら、学会の所用を快く引き受ける先生は多くはいない。会員のため、すなわち他人のためという利他的な行動をすることを行為規範に置いている人でないとできない。大多数の会員は、学会運営の労をとっているボランティア精神を持つ少数者に依存している。須田先生は、人間社会において立派な価値観を持ち実行してこられた。私は須田先生の知己として、その生きざまに深い敬意を感じ、これまでの友情に感謝するのみである。

（2012年12月　日本ディスクロージャー研究学会会長）